

# 労働関連語彙の日独比較\*

——語彙意味論の観点から——

西 嶋 義 憲

## Abstract

The Japanese word *Rodo* (労働) is a translation from words of European languages like *Arbeit* in German and *labor* in English. Therefore, *Rodo* in Japanese and *Arbeit* in German are in a translational relation and can be semantically equivalent. However, their related words of each language in everyday use cannot always be equivalent between German and Japanese because their use is influenced historically and culturally in each country. In this study, labor-related words in both languages are compared on the basis of ordinary lexico-semantic dictionaries in order to analyze differences and similarities in their meanings. The semantic comparison will show what values are relevant in working life in each society, for example, “isogashisa” (busyness) in Japan and “Erholung” (rest) in Germany.

## 1. はじめに

印象としてではあるが、日本人とドイツ人の仕事をする姿はかなり違って見える。たとえば、ドイツ人はリラックスし、ゆったりと仕事をしているようだが、日本人は忙しそうにばたばたと働いているような印象を受ける。印象に基づくこのような両社会での振る舞いの違いは、日常的活動を表わす言語表現に反映し、語彙化されている可能性がある。そのような言語表現を紹介しよう。日本では日常的に使用される慣用表現である（下線は筆者による。以下、同様）。

- (1) お忙しいところ，ご面倒をおかけして申し訳ありませんが，速やかなご回答をお願いいたします。
- (2) 先生はいつもお忙しそうですね。ところで，まことに申し訳ないのですが，この原稿に目を通していただけないでしょうか。よろしくお願いします。

上例(1)と(2)のように依頼の際，「お忙しいところ」「お忙しそう」といった語句を伴った慣用表現を依頼文の前ないし後で使うことがある(頼 2005)。このように，依頼の際「忙しさ」に言及するのは，日本社会では「忙しさ」が通常の状態，場合によっては極めて高い価値をもちうるからだと推測される。次の表現(3)はたしかに「忙しさ」を直接表現する語句こそ含まれてはいないが，日常的に目にしたり耳にしたりするものである：

- (3) お手すきの際で結構ですので，よろしくお願いいたします。

「お手すきの際で」という表現の「お手すき」というのは，文字通り「手が空いている」状態で，明示的に「忙しさ」に言及されていないが，この表現の使用の背景に常態である「忙しさ」が想定されていることは明らかであろう。このように「忙しさ」が日常的な事象であるなら，「忙しくないこと」は逆に，「怠け者」という印象さえ与えやすい。「怠け者」というレッテルを貼られないために，日常生活において「忙しさ」を戦略的に演出して見せることがごくふつうに観察される(cf. 大浜 1989)。

日本社会において依頼の際，上例(1)(2)(3)で見たように日常的な「忙しさ」を背景とした慣用表現が使われるのは，依頼による相手へのさらなる負担に配慮していることを示すためでもある。ところが，ドイツ語においては，上例のような日本語の慣用表現に相当する語句が存在しない。もし上記の(1)のような日本語の慣用表現をドイツ語に逐語訳するとすれば，つぎのようになろう：

- (4) Entschuldigung, dass ich Sie störe, während Sie beschäftigt sind, aber ich bitte Sie um Ihre sofortige Antwort.

このドイツ語表現は、たしかにドイツ語の文法規則にのっとってはいるが、通常は使用することがないという点で奇妙な表現とみなされる。もし同じような場面なら、ドイツ語では間接的に、たとえば接続法を用いて、つぎのように表現するのが普通であろう：

- (5) Es wäre Ihnen sehr dankbar, wenn Sie mir sofort darauf antworten würden.

このように、ドイツ語では通常、相手の「忙しさ」に言及することはない。しかし、だからといって、相手の時間を問題にすることがないわけではない。それは、必要ならば相手の時間を自分のために割くことに対する配慮を表現する場合である。そのため上例(5)に、たとえば、つぎのような発話を付け加えることができる：

- (6) Im voraus danke ich Ihnen dafür, dass ich Ihre kostbare Zeit nehme.

つまり、相手の時間は相手を使うためにあり、それは本人にとってかけがえのない「貴重な時間」(kostbare Zeit)とみなされる。その時間を他人のために提供してくれることに対してお礼を述べるという発想を採用している。他方、日本語では、日本人話者は依頼の際、謝罪文を利用する。それは、相手にはすべきことがたくさんあり、忙しいと想定している。その上さらに用件を付加することにより、より忙しくさせてしまうことになるが、それを済まないと考えるからである。

このように、聞き手への配慮を戦略的に表現する慣用定型表現は、ドイツ語と日本語でその発想法が異なっている。

## 2. 目 的

上であげたような例が示しているように、「忙しさ」は、日本のコミュニケーションにおいて重要な働きをしている。ところが、ドイツ語では、「忙しさ」

はコミュニケーションにおいてそれほど関与的であるとは思えない。ドイツ人にとっては、時間をコントロールすることは当たり前と信じられているからであろう<sup>1)</sup>。コミュニケーション行動にかかわるこのような違いは、労働活動においても認められる。というのも、労働活動は、人間の活動の一つであるからである。

このような発想にもとづいて、日常的行動に関する日独の違いは日本とドイツの労働関連語彙の意味に反映している可能性があると考えた(Hermanns 1993)。本稿では、対応する労働関連語彙の日独比較を行ない、上述の仮説の検証を試みる。

### 3. 先行研究

Hermanns (1993) は、労働に関する一般的な語であるドイツ語の「Arbeit」を、日常的辞書を用いて語彙意味論的に分析し、その意味の歴史的変遷を明らかにした。それによると、もともと「Arbeit」は、キリスト教の影響下において楽園追放後の苦役を意味し、厭うべきものと見なされていた。その後、ルターが「Arbeit」の価値を高めた。「Arbeit」の意味は当初、肉体労働に限定されていたが、現代ドイツ語では用法が拡大変化し、精神労働の意味も獲得した。したがって、「Arbeit」は現在では肉体労働と精神労働の両方の意味をもつ。

Hermanns & Zhao (1996) は、ドイツ語の「Arbeit」とその中国語対応語「労働(laodong)」を語彙意味論的に比較した。中国語の「労働」は肉体労働の意味しかなく、精神労働の意味は含まれていない。中国語で精神労働を表わすのは、別の語「工作(gongzuo)」である。中国語では、ドイツ語と異なり、肉体労働と精神労働は別の語で表現され、労働の二つの側面が区別されている。

武田(2008)は、日本語の「労働」は明治時代に西欧概念の「labor」などからの翻訳語として成立し、日本における労働意識が歴史的に変化したことを経済学の観点から指摘している。武田(2008)は、たしかに労働概念の歴史的変化に焦点をあてているが、日本語の他の労働関連語彙については考慮していない。

そこで、本稿では、このような労働関連語彙について語彙意味論の観点から日独比較を行ない、両社会における労働活動にかかわる諸概念の違いを明

らかにし、それぞれの社会で労働活動に関与的な要因を分析する。

#### 4. 調査方法

本稿で分析の対象となるのは、以下の単語である：

ドイツ語 (アルファベット順)

「Arbeit」「arbeiten」「Beruf」「Ferien」「Freizeit」「Fünf-Tage-Woche」「Pause」  
「ruhen」「Ruhetag」「Sonntag」「Urlaub」「Service」「Werktag」

日 本 語 (あいうえお順)

「休暇」「休憩」「休日」「サービス」「仕事」「週休二日」「職業」「日曜日」「働く」  
「平日」「休み」「休む」「余暇」「労働」

これらの語彙の意味を比較するために、近年出版された中型現代日常語辞典を用いる。語彙の語義説明は、これらの辞書に記載されている語義情報をもとに比較される。使用する辞書は、現代語中心主義という編集方針およびほぼ同規模の見出し語数という観点から比較可能な、つぎの二冊である。

ドイツ語：*Duden Deutsches Universalwörterbuch (DUW)*. 4., neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Herausgegeben von der Dudenredaktion, Mannheim/ Leipzig/ Wien/ Zürich: Dudenverlag, 2001.  
(約14万語/1892ページ)

日 本 語：『大辞林』第3版，松村明編，三省堂，2006.  
(約24万語/2754ページ)

#### 5. 結 果

結果の詳細は引用ページも含めて論文末尾にまとめて掲載してある **Anhang** を参照のこと。紙幅の都合により、全部を取り上げることはできないので、本稿において特に論じる主なものを紹介する（「サービス」の日独比較について）

ては西嶋(2001)を参照)。

1. 「work」の日独対応表現
2. 「arbeiten」と「働く」の語源的意味
3. 「week day」の日独対応表現
4. 「five-day week」の日独対応表現
5. 「leisure」の日独対応表現

## 5. 1. 英語動詞「work」の日独対応表現

### 5. 1. 1. 動詞としての「work」

動詞としての「work」のドイツ語と日本語の対応表現は、「arbeiten」と「働く」である。それぞれについて詳しくみていく。

arbeiten :

- a) Arbeit leisten, verrichten ; tätig sein
- b) beruflich tätig, beschäftigt sein

働く :

- (1) 肉体・知能などを使って仕事をする。一生懸命にする。
- (2) 職業・業務として特定の仕事をもつ。

ドイツ語の「arbeiten」と日本語の「働く」を比べてみても、その記述に大きな違いは認められない。ただし、日本語の「働く」の辞書記述の中に「肉体・知能などを使って」「一生懸命に」という説明がある。前者については、「労働」の語義説明にある「からだを使って」との対比でこのように総合的な意味が説明されているのであろう。ドイツ語ではHermanns (1993) が指摘しているように肉体・知能の両方の活動を意味するのと同様である。つぎに後者の「一生懸命に」は、上で触れた「忙しさ」に言及したり、それを見せかけたりすることと関係している。このような意味は、ドイツ語の「arbeiten」には記載されていない。

### 5.1.2. 名詞としての「work」

名詞としての「work」のドイツ語と日本語の対応表現は、「Arbeit」と「仕事」である。

Arbeit: [...schwere körperliche Anstrengung, Mühsal, Plage; die heutige Bed. seit Luther]

a) Tätigkeit mit einzelnen Verrichtungen, Ausführung eines Auftrags o.Ä.

b) <o.Pl.> das Arbeiten, Schaffen, Tätigsein; das Beschäftigtsein mit etwas  
仕事:

〔動詞「する」の連用形「し」に「こと(事)」の付いた語。「仕」は当て字〕

(1) すべきこと。しなければならないこと。

(2) 生計を立てるために従事する勤め。職業。

「Arbeit」と「仕事」の辞書記述には明確な差異は認められない。ただし、「Arbeit」の語源的意味には肉体を使った仕事と記されている(下線部を参照)。

### 5.2. 「arbeiten」と「働く」の語源

ここで、「arbeiten」と「働く」の語源を調べてみよう。

arbeiten:

mhd. ar(e)beiten, ahd. ar(a)beiten = (sich) plagen, angestrengt tätig sein

↑ Arbeit

Arbeit:

mhd. Ar(e)beit, ahd. Ar(a)beit = schwere körperliche Anstrengung, Mühsal, Plage; die heutige Bed. seit Luther

働く:

からだを動かす。動く。(『日本国語大辞典 第十巻』p. 1168)

両言語の「arbeiten」と「働く」の語源的意味はまったく異なっている。ドイツ語の「arbeiten」の語源的記述は、中高・古高ドイツ語では、肉体を使った重労働

働, 苦役と説明しているが, 日本語の「働く」のそれは, 「からだを動かす。動く」ということである<sup>2)</sup>。日本語では, 単にからだを動かすことが後に「仕事をする」の意味を獲得したことになる。

### 5.3. 「week day」の日独対応表現

英語の「week day」のドイツ語と日本語の対応表現は, それぞれ, 「Werktag」と「平日」である。ドイツ語の「Werktag」は, 仕事をする日という意味であるが, 日本語の「平日」は, 「普通の日」「普段の日」を意味している。

両言語の対応表現はかなり異なる。ドイツ語では, 働くことが語彙の意味記述に明確に表現されている。他方, 日本語の「平日」では, 働くことが語彙形式に明示的に表現されていない。

### 5.4. 「five-day week」の日独対応表現

英語の「five-day week」にあたるドイツ語と日本語の対応表現は, 「週休二日」と「Fünf-Tage-Woche」である。前者は, 一週間のうち二日間休みがあることを述べているが, 後者は, 一週間のうち五日間働くことが明示されている。

このように両言語の表現法はかなり違っている。ドイツ語の「Fünf-Tage-Woche」では, 働くことに関心がある。つまり, 週に何日間仕事をしなければならないかに注目している。ところが, 日本語の「週休二日」は, 休日に関心がある。つまり, 週のうち何日間自由に休めるのかに注目している。

### 5.5. 「leisure」の日独対応表現

英語の「leisure」のドイツ語と日本語の対応表現は, 「Freizeit」と「余暇」である。それぞれ, 辞書でどのように記述されているのかを見てみよう。

Freizeit :

Zeit, in der jmd. nicht zu arbeiten braucht, keine besonderen Verpflichtungen hat; für Hobbys od. Erholung frei verfügbare Zeit

(Erholung: das Zurückgewinnen von Gesundheit u. Leistungsfähigkeit)



余暇：

仕事の合間のひま。仕事から解放されて自由に使える時間。ひま。

これもまた、両言語でかなりの違いが認められる。ドイツ語の「Freizeit」は、働く必要のない自由時間の意味である。この語の辞書記述には、働くことによって失われてしまった健康と成果を挙げる能力を回復させる、という目的についても言及されている。この目的は、他のすべての関連する語彙（「Ruhe」「Ferien」「Pause」「Urlaub」など）にも認められる。

他方、日本語の「余暇」は、「余計な時間」もしくは「余った時間」を意味している。この語が示唆しているのは、「仕事の合間」という説明からわかるように、ほとんどの時間は仕事に費やされ、その残りが「余暇」として使われるということである（「余生」と比較すると興味深い）。ドイツ語対応表現と異なり、この語の辞書記述にその目的への言及がない。これは、他の関連する語彙（「休暇」「休日」など）にも当てはまることである。

## 6. 考 察

上記の結果が示しているように、辞書記述を見る限り、日本とドイツの日常生活における労働に対する意識は異なる。すなわち、働くことは、日本では日常において当たり前の活動とみなされるが、ドイツではそうではない。この違いは、たとえば英語の「week day」に相当する日本語とドイツ語表現を比較すれば容易に理解できる。「week day」は日本語で「平日」と訳され、ドイツ語では「Werktag」（仕事日）と訳される。「平日」は「ふつうの日」という意味であり、その表現自体にはそこで何が行なわれるのか明示されていない。ところが、ドイツ語の「Werktag」は、働く日を意味し、語自体にこの日がどういう日であるのかが明示してある。この違いは示唆的である。「平日」という日本語表現によれば、働くことが当たり前であり、そのため、それについてあえて表現として言及する必要がないということになる。ところが、ドイツ語の「Werktag」という表現では働くことが表現自体に表わされていることから、働くことは特別な活動とみなされていると解釈できる。

英語の「leisure」に関していえば、ドイツ語と日本語の対応語彙もかなり違っている。ドイツ語「Freizeit」の意味は働く必要のない時間のことである。この語の辞書説明では、基本的な意味を説明した後、その目的の一つを「Erholung」（体力気力の回復）として記述している。同様の説明は、「Ruhe」「Ferien」「Pause」「Urlaub」といった他の表現でも見ることができる。ところが、日本語の対応表現「余暇」の辞書記述には「仕事の合間のひま」、すなわち、継続する仕事の中断として記述され、その目的については言及されていない。他の関連する語彙「休み」「休憩」「休息」「ひま」についても同様である。

日本語とドイツ語では一週間に対する態度も異なる。それには二つの関心方向が区別される：(1)休日志向と(2)労働志向である。英語の「five-day week」にあたる日本語とドイツ語はそれぞれ、「週休二日」と「Fünf-Tag-Woche」である。日本語の「週休二日」の背景には、働く事が当たり前なので、週にどのくらいの日数休めるかに関心がある。休日志向といえる。ところが、ドイツ語の「Fünf-Tag-Woche」は、働く事は当たり前ではなく、特別なこととみなされているので、週のうち何日働くのかに関心がある。したがって、労働志向に分類可能である。

すでに見たように、『日本国語大辞典』によれば、「働く」の語源は「からだを動かす。動く」ことと記されている。かつてはからだを動かすことと働くことが等価とみなされていたのだろう。外見上動いていることは働いていることでもあったということだ。ところで、「休み」の意味は、その動きにおける中断のことである。常に動いているということ、すなわち、働くということは、日本では当たり前、普通とみなされているので、そのため、あえてリフレッシュするための十分な時間を確保する必要はないかのようである<sup>3)</sup>。ところがドイツ語では、働くことは特別な活動とみなされる。働くことは普通、当たり前でないので、働くことと疲れがたまり、それを回復させる必要が生じる<sup>4)</sup>。

日本語の労働関連語彙の語義説明は、働くことがふつうで当たり前であるだけでなく、それ以上に、望ましいもしくは推奨される活動であるという印象を与える。この印象は、冒頭で引き合いに出した慣用表現(1)(2)(3)がなぜ日本語に存在し、ドイツにはないのかを部分的に説明するだろう。

ここで、「1. はじめに」で例示した日常的な慣用句にもどってみよう。そ

ここでは「忙しさ」に言及した慣用表現を取り上げた。日本では、働くことが日常的であり、「忙しい」ことが普通、当たり前とみなされているという上述の語彙分析の結果を考慮すると、対人コミュニケーション行動の表現として「忙しさ」に言及することは理にかなっていることがわかる。とりわけ目上の人への挨拶行動では、聞き手の「忙しさ」に言及することがしばしばなされる。それは、目上の聞き手に対して、配慮、すなわち「敬意」を示すためである。「忙しさ」は、日本社会では高い価値をもっているとみなされる。なぜなら、能力があり信頼できる人たちは、他の人たちから多くのことをするように頼まれ、その結果忙しくなるからである。逆に、「忙しくない」ことは「怠け者」の印象を与えてしまう<sup>5)</sup>。そのため、そのような考え方を利用して、周りの人たちから能力があるように見られるように、意図的に「忙しさ」を演出する人たちも出てくるわけである。このようにして「忙しさ」はすでに見たように言い訳になったり、ある種の防衛行動として理解されることがある。

他方、日本語慣用句のドイツ語対応表現では、聞き手は自分の使える時間に関心があり、邪魔されたくないのも、聞き手の貴重な時間への話者による配慮を表現している。したがって、聞き手自身の自由に使える時間に言及することは、円滑なコミュニケーションにおいて関与的であることがわかる。

日本語とドイツ語の慣用句は聞き手への話者の配慮を表現している点で似ているが、その戦略的な手段が異なっているといえる。もし聞き手が自分の時間に制約を加えられたと感じられそうなら、聞き手の「忙しさ」に言及することは、日本における円滑なコミュニケーションのための重要な慣用表現となる。他方、ドイツでは、聞き手の「貴重な」時間に直接に言及し、その犠牲に対して敬意を表することはドイツ語のスムーズなコミュニケーションに適っていることになる。

## 7. おわりに

日本語とドイツ語の労働関連語彙の対照結果を図式的にまとめると次のようになる。

日 本：

日本語の辞書記述によれば、働くことは、日常生活において普通ないし当たり前前の活動と見なされる。それは、したがって、働いている時間と働いていない時間を明確に区別するのが難しいということでもある。明確に区別できないということは、常に忙しく動いているように見えることと関係している。そして、忙しいことは望ましいことでもある。慣用表現の使用に關していえば、聞き手の「忙しさ」についてふれることは、挨拶行動では重要なことである。

ドイツ：

ドイツ語の辞書記述によれば、働くことは日常生活の特別な時間と見なされ、働くことによって失われてしまった体力や気力それに健康を取り戻すために、仕事の後には休養をとることが必要とされる。したがって、働いている時間と働いていない時間を明確に区別することは当たり前であり、そのため、時間の管理は自分の時間を確保するに当たって基本的な関心事となる。

注

- \* 本稿は、ドイツのオスナブリュック市で開催された日独社会科学学会第10回大会(2008年8月28日～31日)で口頭発表した英文原稿(A Comparison of the Concepts of Arbeit and Rodo(「労働」)—From a Point of View of Lexical Semantics—)の改訂日本語版である。なお、英語版は、2009年9月に下記の論文集所収の一編として刊行予定である：

Yoshinori Nishijima: “A Comparison of the Concepts of *Arbeit* and *Rodo* —From a Point of View of Lexical Semantics —”. In: György Széll, Heinz Sünker, Anne Inga Hilsen & Francesco Garibaldo (eds.): *QUALITY OF LIFE & WORKING LIFE IN COMPARISON*. Frankfurt a.M., etc.: Peter Lang, 2009.

- 1) 1993年のことだが、知り合いのドイツ人留学生と日本人学生が会話している場に居合わせ、つぎのような二人のやり取り(日本語)を聞いたことがある。話題は、その前日に行なわれた国会総選挙についてである(以下のやり取りは、その一部を記憶に基づいて再構成したものである。大文字の「D」と「J」はそれぞれドイツ人学生と日本人学生を表わす)：

D: きのう、総選挙があったよね。どうだった？

J: 行かなかったよ。

D: 選挙に行かなかったって？ どうして行かなかったの？

J: 忙しかったから。

D: 忙しかったって、かなり前から分かっていたことじゃないの？

J: ……

最後の応答、すなわち何も言わない日本人学生の行動から、その前の発言で提示した理由がドイツ人学生にうまく理解してもらえなかったことに戸惑いを感じていることが伺える。「忙しさ」を理由とする表現は、日本では頻繁に用いられ、それを使えばたいいの場合相手は納得することになる効果的な言い訳と一般に信じられているからだ。ところが、この定型表現がドイツ人学生にとっては理解しがたいものであったようだ。ドイツ人は一般に時間は自己管理できるものと信じているからである。もし時間管理できず、多忙を極めるとしたら、その人物は無能と見なされることさえある。

- 2) 語源という歴史的意味がかかわるので、現代語中心の『大辞林』ではなく、語源に詳しい『日本国語大辞典』を利用した。
- 3) 交通事故に関する日本の新聞記事では、一般に当事者の名前と年齢が公表され、さらに職業まで報道される。これは、個人情報保護の徹底したドイツではまずみられない。日本においても個人情報保護は近年、重要な関心事とはなっているが、それよりも個人をある程度特定するための情報提供を優先させる。これは、第一に友人や知人、親戚などが自分に関係する人物に関心をもって見ていることと関係しているだろう。また、事故当事者の職業に言及する理由は、日本では労働時間は日常生活の大部分を占め、そのため職業は人格形成と関係していると信じられていることと無関係ではあるまい。事故の原因を推測するために、職業は読者に重要な情報を与えうと考えられているのだろう。さらに、職業は新聞や雑誌などのマスメディアへの投稿の際にも必要となる。たとえば、南ドイツ新聞(Süddeutsche Zeitung)と朝日新聞の投稿欄を比較してみよう。前者では、名前とアドレスが必要項目であるが、後者では、名前やアドレスのほかに、職業と年齢の記入が要求されている。日本では、職業や年齢によって投稿者の発言をある特定の型(「らしさ」との関係で理解させようとしているかのようである。
- 4) カレンダーの曜日の始めが日曜か月曜かという違いも示唆的である。辞書記述には、日本語の「日曜日」は「週の第一日」、ドイツ語の「Sonntag」は「siebter Tag der mit Montag beginnenden Woche」(月曜から始まる週の七日目)と説明されている。実際に、手元にある日本のカレンダーは日曜日から始まり土曜日で終わる。ドイツのカレンダーは、月曜から始まり日曜で終わっているが、ドイツのカレンダーを見る限り、働いた疲れを癒すために週末に日曜日が置かれているように見える。
- 5) 日本のある大学で英語やドイツ語などの外国語を教えることになったとしよう。そ

うしたら、クラスの中に奇妙な行動をとる学生がいることに気づくだろう(大浜 1989)。ある文法事項を学生たちに説明した後、学生たちが「的確に理解したかどうかを確認するために一人の学生に質問しようとしたとしよう。誰かを指名するために、学生たちを見回すと、突然ノートに何かを書きつけ始めたり、辞書を引き始める学生が出だす。そのような行動をとる学生は忙しく勉強している姿を演出し、忙しそうに見せようとする。そういったこれみよがしの行動は、「今、一生懸命勉強していて忙しいので自分には尋ねないでくれ」という合図とみなすことができる。

## 辞 書

『大辞林』：松村明編『大辞林』第3版，三省堂，2006。

DUD: *Duden Deutsches Universalwörterbuch*. 4., neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Herausgegeben von der Dudenredaktion, Mannheim/Lepzig/Wien/Zürich: Dudenverlag, 2001.

\*

『日本国語大辞典』：日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編

『日本国語大辞典』第二版，小学館，2001

## 文 献

- Hermanns, F.: „Arbeit. Zur historischen Semantik eines kulturellen Schlüsselwortes“. In: *Jahrbuch Deutsch als Fremdsprache* 19, 1993, 43-62.
- Hermanns, F. & M. Zhao: „Arbeit“ in China und in Deutschland. In: A. Wierlacher / G. Störtzel (Hg.), *Blickwinkel. Akten des III. Internationalen Kongress der Gesellschaft für Interkulturelle Germanistik, Düsseldorf 1994*. München: iudicium, 1996, 413-436.
- 頼 美麗：「依頼における『お詫び・謝罪型』表現に関する考察—日本語母語話者と台湾人日本語学習者を対象に—」『早稲田大学日本語教育研究』6，2005，63-77.
- 西嶋義憲：「日常的『サービス』概念の日独比較」『広島日独協会会報』48，2001，21-24.
- 大浜るい子：「へんてこりんな日本語」『言語文化研究』9(1)，松山大学，1989，43-62.
- 武田晴人：『仕事と日本人』ちくま新書，筑摩書房，2008.

## Anhang

(注) 下線は論者による。

《忙しさ》

いそがしい【忙しい】(『大辞林』，p.137)

〔動詞「急ぐ」の形容詞化〕

- (1) することが多くて暇がない。多忙である。「大売出しの準備で一・い」  
(2) 落ち着きなくよく動き回って、あわただしい。「小鳥が木の間を—くとびまわる」  
〔類義の語に「せわしい」があるが、「せわしい」は「用事が多かったりして気分が落ち着かない意を表す。それに対して「忙しい」はすることが多くてひまな時間がない意を表す〕

てすき【手隙・手透き】(『大辞林』, p.1726)

仕事の区切りがついたりして、手があいていること。「お—の時にでもおいでください」

#### 《work(名詞)》

ろうどう【労働】(『大辞林』, p.2715)

〔古くは「労働」と書いた。「働」は国字〕

- (1) からだを使つて働くこと。特に賃金や報酬を得るために働くこと。また、一般に働くこと。「八時間—する」「肉体—」  
(2) 〔経〕 人間が道具や機械などの手段を利用して労働の対象となる天然資源や原材料に働きかけ、生活に必要な財貨を生み出す活動。

Arbeit [...schwere körperliche Anstrengung, Mühsal, Plage; die heutige Bed. seit Luther] 1.a) Tätigkeit mit einzelnen Verrichtungen, Ausführung eines Auftrags o.Ä. b) <o.Pl.> das Arbeiten, Schaffen, Tätigsein; das Beschäftigtsein mit etwas (160)

しごと【仕事】(『大辞林』, p.1089)

〔動詞「する」の連用形「し」に「こと(事)」の付いた語。「仕」は当て字〕

- (1) するべきこと。しなければならないこと。「台所の—」「—が片付く」「—に取りかかる」  
(2) 生計を立てるために従事する勤め。職業。 「お—は何ですか」「—を探している」

= Arbeit

= Beruf

しょくぎょう【職業】(『大辞林』, p.1254)

生計を維持するために日常している仕事。生業。職。

Beruf[erlernnte]Arbeit, Tätigkeit, mit der jmd. sein Geld verdient; Erwerbstätigkeit(DUW, p.264)

せいぎょう【生業】(『大辞林』, p.1371)

暮らしを立てるためにする職業。なりわい。すぎわい。「文筆を—とする」

= Beruf

《work(動詞)》

はたら・く【働く】(『大辞林』, p.2038)

- (1) 肉体・知能などを使って仕事をする。一生懸命にする。「一・いたあとは飯がうまい」「このプロジェクトの中心になって一・く」
- (2) 職業・業務として特定の仕事をもつ。「一・きなから大学を卒業した」  
**arbeiten** [(sich) plagen, angestrengt tätig sein, zu ↑ Arbeit] 1.a) Arbeit leisten, verrichten; tätig sein b) beruflich tätig, beschäftigt sein (DUW, p.160)

やす・む【休む】(『大辞林』, p.2555)

〔「安し」と同源〕

- (1) 仕事や動作を中止して、体や心を楽にする。休憩する。休息する。「二時間働いたら一〇分一・むようにする」「一・まずに働いた」「急な山道を一・みながら登る」
- (2) 本来行くべき学校や勤めに行かない。「病気で学校を一・む」「会社を一・む」
- (3) 継続的・定期的に行なってきたことを一時とりやめる。「日記をつけるのを二日間ほど一・んだ」
- (4) 眠るために床につく。「毎晩九時には一・みます」

Pause machen → Pause

**ruhen** 1.a) irgendwo ruhig (1) sitzen, liegen[u. sich entspannen]; sich durch Nichtstun erholen (DUW, p.1332)

(entspannen: sich körperlich u. seelisch für kurze Zeit von der Belastung durch anstrengende u. angespannte Tätigkeit frei machen u. neue Kraft schöpfen) (DUW, p.471f.)

やすみ【休み】(『大辞林』, p.2554)

- (1) やすむこと。休息。「一なく働く」
- (2) 仕事・勉強などをしない日・期間。「学校が一になる」「夏一」
- (3) 会社・学校などに出勤・出席しないこと。「風邪で一をとる」
- (4) 寝ること。就寝。「夜の一を知らせる鐘が鳴り渡って／破戒 藤村」

**Ferien** a) mehrere zusammenhängende Tage od. Wochen dauernde, der Erholung dienende, turnusmäßig wiederkehrende Arbeitspause einer Institutionen (z. B. der Schule, der Hochschule, des Gerichts od. des Parlaments) b) Urlaub (DUW, p.532)

(Erholung: das Zurückgewinnen von Gesundheit u. Leistungsfähigkeit) (DUW, p.483)

きゅうけい【休憩】(『大辞林』, p.634)

(名)スル

何かを行なっている途中で、少しの間休むこと。休息。「一所」「五分間一する」〔類義の語に「休息」があるが、「休息」は仕事などをひとまず終えて短時間または長時間休む意



を表す。それに対して「休憩」は仕事や運動などの途中で少しの間休む意を表す]

**Pause** 1.a) kürzere Unterbrechung einer Tätigkeit, die der Erholung, Regenerierung o.Ä. dienen soll (DUW, p.1190)

(Erholung: das Zurückgewinnen von Gesundheit u. Leistungsfähigkeit) (DUW, p.483)

きゅうそく【休息】(『大辞林』, p.638)

(名)スル

仕事や運動などをやめて休むこと。ゆったりした気分できつろぐこと。「しばらく一する」「一日」→休息(補説欄)

= **Pause**

きゅうか【休暇】(『大辞林』, p.633)

会社などのやすみ。普通、日曜日や休日以外のものをいう。「一を取る」「夏季一」

**Urlaub** (in Betrieben, Behörden, beim Militär nach Arbeitstagen gezählte) dienst-, arbeitsfreie Zeit, die jmd. [zum Zweck der Erholung] erhält (DUW, p.1675)

(Erholung: das Zurückgewinnen von Gesundheit u. Leistungsfähigkeit) (DUW, p.483)

ひま【暇／閑】(『大辞林』, p.2150)

㊦(名)

- (1) 仕事や義務に拘束されない時間。自由な時間。「一をもてあます」「一を見つける」
- (2) 休み。休暇。
- (3) 主従などの関係を絶つこと。いとま。「一を出す」[夫婦関係が従属関係を伴うような旧制度下では、夫婦関係を断つこともいった]

㊦(形動)[文]ナリ

仕事や義務に拘束されず、自由にできる時間があるさま。するべきことがないさま。「仕事がなくなって一になる」「お一な時には是非お寄り下さい」「一で一で時間をもてあます」→いとま(補説欄)

**Freizeit** Zeit, in der jmd. nicht zu arbeiten braucht, keine besonderen Verpflichtungen hat; für Hobbys od. Erholung frei verfügbare Zeit (DUW, p.574)

(Erholung: das Zurückgewinnen von Gesundheit u. Leistungsfähigkeit) (DUW, p.483)

いとま【暇・遑】(『大辞林』, p.165)

[物事と物事との間の空白の意]

- (1) 仕事のない時。時間の余裕。ひま。「応接に一がない」「枚挙に一がない」
- (2) 休むこと。休暇。「一週間のお一をいただく」
- (3) 職務をやめること。また、やめさせること。ひま。「一を出す」[玄機は僮僕に一を遣って]魚玄鵬外[類義の語に「ひま」があるが、「ひま」は仕事がなく、のんびりしていられる時間の意を表す。それに対して「いとま」は文章語として用いられ、仕事の

ない時間の意を表す]

《leisure》

よか【余暇】(『大辞林』, p.2615)

仕事の合間のひま。仕事から解放されて自由に使える時間。ひま。

= **Freizeit** Zeit, in der jmd. nicht zu arbeiten braucht, keine besonderen Verpflichtungen hat; für Hobbys od. Erholung frei verfügbare Zeit (DUW, p.574)

(Erholung: das Zurückgewinnen von Gesundheit u. Leistungsfähigkeit) (DUW, p.483)

レジャー **[leisure]** (『大辞林』, p.2703)

余暇。また、それを使ってする娯楽。「一産業」

= **Freizeit**

あそ・ぶ【遊ぶ】(『大辞林』, p.48)

- (1) 仕事や勉強をせず、遊戯などをして楽しく時を過ごす。「かくれんぼをしてー・ぶ」「よく学びよくー・べ」
- (2) 酒・女・ギャンブルなどで楽しむ。遊興をする。「ー・ぶ金に困る」
- (3) 職をもたず、ぶらぶらする。「定年後はー・んで暮らす」

**faulenz**

sich dem Nichtstun hingeben[u. dabei Dinge vernachlässigen, die man zu erledigen hätte] (DUW, p.524)

《week day》

へいじつ【平日】(『大辞林』, p.2277)

- (1) ふだん。平生。平素。
- (2) 日曜・祝日以外の日。「ーダイヤ」

**Werktag** Tag, an dem allgemein gearbeitet wird (im Unterschied zu Sonn- u. Feiertagen); Wochentag (DUW, p.1803)

きゅうじつ【休日】(『大辞林』, p.636)

- (1) 休みの日。業務・営業・授業などを休む日。
- (2) 特に、国民の祝日。

**Ruhetag** Tag, an dem nicht gearbeitet wird. (DUW, p. 1332)

しゅくさいーじつ【祝祭日】(『大辞林』, p.1191)

- (1) 祝日と祭日。

- (2) 旧制で、祝日と大祭日の併称。祝日として四方拝(一月一日)・紀元節(二月一日)・天長節(四月二九日)・明治節(一月三日)、大祭日として元始祭(一月三日)・新年宴会(一月五日)・春季皇霊祭(春分の日)・神武天皇祭(四月三日)・秋季皇霊祭(秋分の日)・神嘗祭(一〇月一七日)・新嘗祭(十一月二三日)・大正天皇祭(十二月二五日)の計一二日が定められていた。

→国民の祝日

- (3) キリスト教で、キリストの生涯の出来事や聖人の殉教などを記念して祝う日。主日(日曜日)・降誕祭のように月日の定まった固定祝日、復活祭のように年により月日の一定しない移動祝日などがある。祝日。

「祝祭日」：「祝日」と「祭日」との称。多く「国民の祝日」として継承される。

**Feiertag** jährlich wiederkehrender Gedenktag [an dem nicht gearbeitet wird] (DÜW, p.528)

しゅくじつ【祝日】(『大辞林』, p.1192)

祝いの日。特に国が定めた休日。

→国民の祝日

さいじつ【祭日】(『大辞林』, p.978)

- (1) 「国民の祝日」の通称。「日曜・一は休みます」

にちようび【日曜日】(『大辞林』, p.1925)

週の第一日。土曜日の次の日。官公庁、学校および一般企業で休みとする日。日曜。

**Sonntag** siebtter Tag der mit Montag beginnenden Woche (DÜW, p.1469)

しゅうきゅう【週休】(『大辞林』, p.1174)

一週間のうちにある決まった休み。また、その休日。「一二日制」

きんろう-かんしゃのひ【勤労感謝の日】(『大辞林』, p.695)

国民の祝日の一。十一月二三日。勤労をたつとび、生産を祝い、国民が互いに感謝しあう日。もと、新嘗祭(いになめさい)。[季]冬。

しんじょう-さい【新▼嘗祭】(『大辞林』, p.1293)

宮中儀式の一。天皇が新穀を神々に供え、自身も食する。古くは一一月下旬の卯(う)の日、明治六年以降は十一月二三日に行われ、祭日とされた。天皇の即位後初めて行うものを大嘗祭(だいじょうさい)という。いになめさい。

→勤労感謝の日

《service》

さーびす【service】(『大辞林』, p.971)

- (1) 相手のために気を配って尽すこと。「家庭―」「精神―」
- (2) 品物を売るとき, 値引きをしたり景品をつけたりして客の便宜を図ること。

「少し―しましょう」「出血大―」「アフター―」

**Service** <pl. selten>[engl. Service = Dienst, Bedienung <(a) frz. Service < lat. Servitium = Sklavendienst, zu: servire, ↑ servieren]

1. (o. Pl.) a) (im gastronomischen Bereich) Bedienung u. Betreuung von Gästen: das Hotel ist für seinen guten S. bekannt; b) Kundendienst ( 1 ): für dieses Gerät gibt es einen gut funktionierenden S. (DUW, p.1444)